

西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏

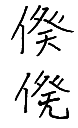
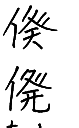

——異本注記の有無について——（五）

本稿は左記の拙論の続編である。

- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ——異本注記の有無について——（一）」
（『鶴見大学紀要』第47号 第一部 日本語・日本文学編 平成22年3月）
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ——異本注記の有無について——（二）」
（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第15号 平成22年4月）
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ——異本注記の有無について——（三）」
（『鶴見大学紀要』第48号 第一部 日本語・日本文学編 平成23年3月）
- ・「西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏 ——異本注記の有無について——（四）」
（『鶴見大学紀要』第48号 第四部 人文・社会・自然科学編 平成23年3月）

25、^{ク#}「遠イ本」(16ウ)

資料 B-22

高山寺本	西念寺本	観智院本
 <small>同音遠 右雨</small>	 <small>上達左 右雨視</small>	 <small>上達左右 雨視</small>
17 オ	16 ウ	仏上 30

資料 B-22 の西念寺本の標出漢字「倭^倭」の項目における冒頭の注記「遠^{ク#}イ本」が観智院本に見えない。鎮国守国神社本では項目自体が佚文であるが、この「遠^{ク#}イ本」は高山寺本にも見えないので、西念寺本の増補と思われる。

この西念寺本の「遠^{ク#}イ本」は、二行目の類音注記「上達」の「達」字の右隣に記されているところから、「上達」の「達」字が異本では「遠」と記されており、『遠』字には振仮名「ク井」が付されている」という意を

示した異本注記であると思われる。

そもそも標出漢字「倭^倭」の字体については、各写本の標出漢字の字形と、意義注記の記述が「左右雨視」であると考えられるところから、『倭^倭』もしくは『倭^倭』を示したものと考えられる。

とすると、観智院本で「上達」、西念寺本で「上達」とある類音注記は、本来、『上達』とあるべきところではないかと思われる。この「上達」の『達』字は、資料 B-22 の高山寺本の「音達」の「達」字と字形が類似し、西念寺本の「遠」字は、その高山寺本の「達」字に類似していると思われる、また、西念寺本の「遠^{ク#}イ本」の「遠」字の右傍には「ク井」という振仮名が記されているが、高山寺本の「音達」の「達」字の右傍にも朱で「ク井」とあることから、西念寺本の「遠^{ク#}イ本」の「イ本」とは、高山寺本のような状況のものではなかったかと考えられる。

以上のことから、西念寺本の「遠^{ク#}イ本」は、高山寺本系統の写本からの引用である可能性が考えられ、振仮名の「ク井」も同時に引用されたと考えられる。⁽²⁶⁾

26、「將イ」(16ウ)

資料 B-23

高山寺本	西念寺本	観智院本
將 為 ― セムスヘ 17ウ	將イ 為 ― セム スヘ 16ウ	將 為 セムスヘ 仏上 31

資料 B-23 の項目は、次の資料 B-24 の項目とともに、標出漢字「便」の熟字項目の一つである。

資料 B-23 の各写本の熟字を対照すると、観智院本では「將為」と二文字で記されているが、西念寺本と高山寺本では、三文字目に相当する箇所
に「便」字を省略した意を表す符号の「―」が記されている。この資料 B-23 の項目が標出漢字「便」に関する熟字項目の一つであることからすれば、本来は観智院本においても、「將為―」とあったものと考えられ、観

智院本の「將為」項目は、西念寺本の「將為―」項目に対応しているものと考え(17)える。

そこで、資料 B-23 における各写本の注記の状況を見ると、西念寺本の熟字項目「將為―」の「將」字の右の「將イ」という注記が観智院本に見えないことがわかる。鎮国守国神社本では項目自体が佚文であるが、この西念寺本の「將イ」は高山寺本にも見えないので、西念寺本の増補と思われる。

西念寺本の「將イ」は、「熟字項目『將為―(便)』の『將』字が異本では『將』と記されている」という意を示す異本注記であると思われる。

この資料 B-23 と次の資料 B-24 の熟字項目は、万葉集・四八一番歌の「將云爲便 將爲便不知」という一節から見出し語を作成し、資料 B-23 では、「將爲便不知」の「將爲便」の部分の訓読である「セムス(爪)ヘ」を、そのまま注記にしているのではないかという疑いがある。⁽¹⁸⁾ 訓み下しの問題は別としても、この熟字項目の見出し語が万葉集に由来しているのであれば、その記述から、資料 B-23 の西念寺本の「將為―」の「將」字は、『將』または『將』字

であって欲しいところであり、異本注記「将イ」も、それに関する記述であって欲しいところである。

そこで、西念寺本の「将為―」の「将」字と、異本注記の「将イ」の「将」字の関係について考察するために、資料B-23のその他の写本の状況を見ると、その標出漢字について、観智院本では「将」、高山寺本では「将」と記されているところから、本来、西念寺本の熟字項目は、例えば、高山寺本のように『将為―』とあったところに異本対照が行われたところ、異本では観智院本のように『将為―』とあったことにより、『将』字に対して異本では『将』とある旨を異本注記としたのではないかと推測する。すなわち、異本対照当時の着目点としては、『将』字の傍の部分が異本で相違していることに関心があり、傍の《争》の部分が、異本では《争》となっていることを示したかったものではないかと考える。

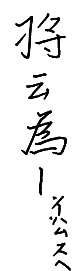


しかし、異本対照後に、西念寺本の系統で転写が実施された結果、まず、『将為―』の『将』字が、「将」のように記されてしまった。この変化は、偏の部分の《𠂔》もしくは《𠂔》を書き崩した際に、《𠂔》のように記されることがあるところからすれば、あり得ないものでもないと思われる。また、異本注記についても、本来、『将イ』とあったものが、転写作業の結果、偏の《𠂔》の《𠂔》を、《𠂔》のように記してしまったものと思われる。

以上の点から、資料B-23の西念寺本の熟字項目「将為―」の「将」字は、高山寺本系統の写本に近しい記述であり、異本注記「将イ」から知られる異本の状況は、観智院本系統のものに近しいものであると考えられる。

27、「将イ」（16ウ）

資料B-24は、前項26の、資料B-23の『将為―（便）』項目とともに、標出漢字「便」の熟字項目の一つであり、その注記の『イハムス（爪）へ』とともに、万葉集の第四八一番歌が出典ではないかという疑いがある。²⁹

資料 B-24

高山寺本	西念寺本	観智院本
 17 ウ	 16 ウ	 仏上 31

資料 B-24を見ると、西念寺本の熟字項目「符云為―(便)」の「符」字の右の「将イ」という注記が観智院本に見えない。鎮国守国神社本では項目自体が佚文であるが、この「将イ」は高山寺本にも見えないので、西念寺本の増補と思われる。

この西念寺本の「将イ」は、「熟字項目『符云為―(便)』の『符』字が異本では『将』と記されている」という意を示す異本注記であると思われる。

西念寺本の熟字項目「符云為―(便)」の「符」字が、本来、『将』もしくは『将』に相当するものであったことは、資料 B-24の観智院本、高山寺本の記載状況から充分推測可能である。そこで、西念寺本の「符云為―(便)」の「符」字の字形については、いわゆる楷書体の『将(将)』字が、西念寺本の「符」のように、その偏を《イ》で記されるように変化してしまう原因については、一般的には考えにくい。しかし、行書体や草書体で記されていた『将(将)』字が、転写の際に楷書化されたとすれば、行書・草書体の漢字を楷書化するに際して、その字画を誤記してしまうことはあり得るのではないかと考える。

すなわち、転写時の底本の『将(将)』字が楷書体でなく、例えば、偏の部分が、資料 B-24の高山寺本のように、『月(イ)』の字画を書き崩した《イ》である『将』字のような記され方であったとする。そして、転写の際に、その《イ》の字画を楷書化することを試みた場合に、字形の類似から、『イ』を《月(イ)》ではなく、『イ』であると勘違いしてしまったのではないだろうか。

但し、西念寺本の「符」字は、傍の部分が《孚》となっており、高山寺本の「将」字の傍が《彳》となっているの

とは相違しているので、『イ』と『イ』の関係のみから、西念寺本と高山寺本の関係を言及することは難しい。その一方、西念寺本の異本注記「将イ」の「将」字は、資料B-24の観智院本の「将」の字形と一致していることから、ここでの西念寺本の異本が、高山寺本よりも観智院本系統の写本と近いものであることは言えそうである。これは、先の資料B-23の『将為—(便)』項目の考察の際と同じ結論になる。

ところで、資料B-23の西念寺本の場合と同様に、西念寺本の系統において、『将(将)』字が楷書体でなかった写本が存在し、現存本が、その影響を受けているという推測は、資料B-24の高山寺本で、実際に『将(将)』字に相当する漢字が書き崩されていることを見れば、あり得ないものではないと考えられる。書き崩された『将(将)』字を転写する際に、その楷書体を正しく想定できなかったことが、資料B-23、24の西念寺本の当該字の字形を異様なものにしているように思われるが、しかし、それ以前に、そもそも、熟字項目とはいえ、漢字の異体字を問題にするのが常である名義抄において「見出し語が楷書体でない」ということは、問題なのではないだろうか。

熟字項目であることは、単字としての表記レベルとは異なるのだとも言えそうではあるが、現実的な問題として、『将(将)』字は一般的によく使用される漢字であろうから、その行書体、草書体を知らないことに責があるとも言えそうであるし、楷書時における異体字の存在を示すことが名義抄のテーマの一つと考えられるところからすれば、少なくとも、注記ではない標出漢字や熟字項目の漢字を書き崩すことにはイレギュラーな感がある。

そこで考えられるのは、前項26の資料B-23と併せて、資料B-24の項目は、その名義抄としての用例採取の段階から、両資料に共通する『将(将)』字は楷書体では記されていないかという疑いである。その考察のために、仮に、用例採取時において、資料B-23、24の『将(将)』字に相当する漢字が、偏《𠂔(𠂔)》を書き崩した『将』であったとした場合の、各写本の現存本の状況を表12a-cに示した。

表-24-a

資料 B-24	資料 B-23		
将		用例採取時	高山寺本 現存本
将 (変更なし)	将 (偏の楷書化)		

表-24-b

資料 B-24	資料 B-23		
将		用例採取時	西念寺本 現存本
符 (偏の楷書化と誤解、 旁の変更)	将 (偏の楷書化と誤解)		

表-24-c

資料 B-24	資料 B-23		
将		用例採取時	観智院本 現存本
将 (偏の楷書化と旁の変更)	将 (偏の楷書化と旁の変更)		

の場合ともに、偏の楷書化が正しくなされたほかに、旁の変更も行われたと考えることができる。

西念寺本類聚名義抄における増補と脱漏

表-24-a～cに示したように、資料 B-23、24

のいずれの場合も、その用例採取時の写本において、偏《𠂔(𠂔)》が書き崩された『将』が記されていたと想定すると、表-24-aの高山寺本の系統の写本では、資料 B-23の場合は偏の楷書化がなされたが、資料 B-24の場合は、楷書化がなされておらず、その元の字形を現存本にまで伝えていることになる。表-24-bの西念寺本の系統の写本では、資料 B-23の場合は、偏の楷書化を試みたことにより、誤解が発生し、「将」となったが、資料 B-24の場合は、その上、さらに旁の字画が変更され、「符」となったことになる。この場合の誤解は、恐らくは知識不足から、偏の楷書化の際に、《𠂔(𠂔)》とするところを、資料 B-23の場合は《𠂔》に、資料 B-24の場合は《𠂔》に思い違いをしてしまったものと思われる。そして、表-24-cの観智院本の系統では、資料 B-23、24

右のように、資料B-23、24の二つの資料をまとめて考えた場合、用例採取時の『將(將)』字の状況がいずれも『將』であつたとすると、現存本に至るまでの間に、最も変更箇所が少ないのが高山寺本で、最も多いのが観智院本ということになる。これは両写本の成立の時期と関係しているのだと推測することも可能である。

西念寺本は両本の中間ということになるが、楷書化の際に、そのあるべき字体を誤解していたということになることは、もちろんであるが、重要な点は、資料B-23においては、偏の楷書化と、旁の変更という二つの変化において、観智院本の系統における変更とは、その発動のタイミングが異なると思われることである。

そして、用例の出典として、万葉集が考えられるところからすると、その万葉集の写本において、前項26の資料B-23と併せて、『將(將)』字が『將』と記されていたものが典拠とされたのではないかという疑いがある。⁸⁰⁾

28、「テイ」／29、「ハルイ」(16ウ・17オ)

資料B-25

高山寺本	西念寺本	観智院本
<p>使 所里所使ニメシムセシムリトヒ ツカヒツカフシソカフヤルツカサトル木シ ツテテツル</p> <p>17ウ</p>	<p>使 所里所使 二人ツカヒツカフ シムセシムタヒ ツカサトルタチ 木シ</p> <p>16ウ・17オ</p>	<p>使 所里所使ニメシムセシムリトヒ ツカヒツカフシソカフヤルツカサトル木シ ツテテツル</p> <p>仏上31</p>

資料B-25の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、そ

れに基づいて、表B-25-aに観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

高山寺本	西念寺本	観智院本
① 祈里祈使二反 ② ツカフ ③ ツカフ ④ シム ⑤ セシム ⑥ タトヒ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサトル ⑩ 禾シ	① 祈里祈使 二人 ② ツカヒ ③ ツカフ ④ シム ⑤ セシム ⑥ タトヒ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサトル ⑩ トル ⑪ テイ ⑫ タテ ⑬ アタ爪 ⑭ タ ⑮ 禾シ	① 祈里祈使二又 ② シム ③ セシム ④ タトヒ ⑤ ツカヒ ⑥ ツカフ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサトル ⑩ 禾シ ⑪ タテマツル

表B-25-aを見ると、西念寺本の標出漢字「使」の注記、⑫「テイ」と⑭「ハルイ」が観智院本に見えないことがわかる。鎮国守国神社本では項目自体が佚文であるが、⑫「テイ」と⑭「ハルイ」はいずれも高山寺本にも見えないので、西念寺本の増補と思われる。

まず、西念寺本の⑫「テイ」については、一見すると、左隣の⑪「タテ」の「タ」に付されたものであるかのように見えるが、それでは異本に『テテ』とある意になり、これは意味不明であるので、⑫「テイ」の記載位置は、現在の場所とは、本来は異なる場所に記されていたのではないかと考える。そこで、⑫「テイ」は、⑪「タテ」の「タ」ではなく、二文字目の「テ」に対して付されたものと考えたい。

厳密に言えば、資料B-25の西念寺本の⑪「タテ」の「テ」字は、その三画目の《ノ》画が、二画目の横画の《一》を貫いて、「チ」と記されている。「チ」の字体は「テ」よりも古い異体字と考えられるから、西念寺本以前の写本に

表 B-25-a

観智院本	西念寺本	高山寺本
① 所里、所使二又 ② シム ③ セシム ④ タトヒ ⑤ ツカヒ ⑥ ツカフ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサトル ⑩ 禾シ ⑪ タテマツル	① 所里、所使二人 ④ シム ⑤ セシム ⑥ タトヒ ② ツカヒ ③ ツカフ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサ ⑩ トル ⑮ 禾シ ⑪ タテ ⑬ アタ爪 ⑫ テイ ⑭ ハルイ	① 所里、所使二反 ④ シム ⑤ セシム ⑥ タトヒ ② ツカヒ ③ ツカフ ⑦ シタカフ ⑧ ヤル ⑨ ツカサトル

とした、もしくは、異本対照作業以前に、写本において、既に、『タチ』を『タチ』と誤った記述が成立しており、それを見た対照者が、異本に『タテ』とあるのを見て、異本注記⑫「テイ」を付したのではないかと考える。

しかし、⑪「タテ」の場合も、また、『タチ』の場合も、標出漢字「使」の字訓としては、やはり不審ではある。ここで一旦、この⑪「タテ」・『タチ』の件から離れて、次に、西念寺本の⑭「ハルイ」について考察することとする。

西念寺本の⑭「ハルイ」は、⑬「アタ爪」の「爪」に対して付された異本注記のように見えるが、異本に『アタハル』とあるというのでは、やはり、その語義を理解したい。

においても、同様の字体で記されていたと考えてよいと思われる。その「テ」の異体字の「チ」を、字画構成の類似から、異本対照者は、カタカナの『チ』が記されたものと勘違いして、注を付したのではないだろうか。⁸¹⁾

すなわち、西念寺本の⑫「テイ」が成立した経緯としては、異本対照時の当該本の『タチ』という記述について、それを『タチ』と記されていると誤解した対照者が、異本に『タテ』とあるのを見て、異本注記⑫「テイ」を付すことで、『タチ』の『チ』が異本では『テ』と記されている」という意を示そう

そこで、いささか乱暴な感はあるが、異本注記と思われる⑭「ハルイ」は、本来、『ツルイ』であつたのではないかと考えたい。⑭「ハルイ」の「ハ」は、『ツ』の《、》の字画が一つ欠けて、さらに三画目の《ノ》の払いの向きが左から右へ変わってしまったものではないかと考える。それにより、西念寺本の⑭「ハルイ」が、本来は『ツルイ』であり、そして、その『ツルイ』が、⑬「フタ爪」のいずれかの文字に付された異本注記であつたとする推測が許されるならば、ここで、『ツルイ』は、⑬「フタ爪」の「爪」に対して付されたものではなく、⑬「フタ爪」の「タ爪」二文字に対して付されたもので、⑬「フタ爪」の「タ爪」は、異本では『ツル』と記されて、『ブツル』とある」という意を示した異本注記であると解釈できる。

ところで、資料B-25を見ると、西念寺本の⑬「フタ爪」の直前には、先の考察で不審に思われた⑪「タテ」の注記が見える。西念寺本の⑬「フタ爪」という和訓は、標出漢字「使」の字義からして、あり得ないものではないと思われるし、⑪「タテ」の次で改行になつていたので、一見すると、前行末の⑪「タテ」と次行冒頭の⑬「フタ爪」とは別の注記であるかのように見えるが、⑪「タテ」と⑬「フタ爪」は複合して『タチフタ爪』という一つの注記であると考えたと、⑪「タテ」の語義に対する不審が解決され、やはり、『タチ』ではなく、⑪「タテ」であるべきことがわかる。⁽²⁸⁾

ここで、西念寺本の⑫「テイ」と⑭「ハルイ」の二つの異本注記が、同一人物の手によって付されたものであるとすれば、その人物は、『タチフタ爪』の『チ』を『テイ』と考えて、異本対照時に⑫「テイ」と付した可能性があるということになるが、それは単なる勘違いであるから、大きな問題ではない。問題は、『タチフタ爪』の『タ爪』に付された⑭「ハルイ」である。

先に述べたように⑭「ハルイ」が、本来、『ツルイ』とあつたものだとすると、当該本の『タチフタ爪』に対して、

異本では『タテフツル』とあったことになる。そこで、表B-251aを見ると、観智院本には、西念寺本に記載のない⑪「タテフツル」の注記が存在していることがわかる。そこからすれば、西念寺本の異本対照者は、西念寺本の⑪「タテ」と⑬「フタ爪」、つまりは『タチフタ爪』に対応する注記として、観智院本にあるような『タテフツル』もしくは『タテフツル』を考えていた可能性がある。

確かに、『タチフタ爪』と『タテフ（フ）ツル』は、意義的に似通ったものではあるが、別語である。この両者のいずれかを転写時における誤写と考えるか、それぞれの系統で別々に増補されたものとするかの判断は難しいように思われる。⁽⁸³⁾

しかし、異本対照者が、『タチフタ爪』と『タテフ（フ）ツル』を別語と考えていたのであれば、異本対照作業時には、当該本にない『タテフ（フ）ツル』の注記が異本に見えていることになるのであるから、異本注記としては、どこか別の空いているスペースに『タテフ（フ）ツルイ』などと付したはずである。それが、実際には、『タチフタ爪』の『タ爪』に『ツルイ』と付されていることからすれば、異本対照者は、『タチフタ爪』が、異本では『タテフ（フ）ツル』と記載されているという、両者を関連付ける判断をしたということになる。

最後に、高山寺本においては『タチフタ爪』も『タテフ（フ）ツル』も記されていないことからすれば、それらは高山寺本の成立以降に増補されたことになるが、その増補作業は、別々の写本の系統において別個になされたもので、それが、偶然、『タチフタ爪』と『タテフ（フ）ツル』という語義・語形の類似したものになったと考えるのは、不自然なように思われる。やはり、ある時、ある写本に『タチフタ爪』か『タテフ（フ）ツル』のいずれかが増補され、その後の転写によって、語義・語形の類似が原因となつて、一方がもう一方へと誤記されたと考える方が自然ではないかと考えたい。しかし、どちらがどちらへという点になると、不明と言わざるを得ない。記述の見間違いは論

理を越えることがあり得るからである。ただ、乱雑な書写により、その後の転写時におけるカタカナの字画の理解に変化が生じ、それによって語形の変化が生じたとするのであれば、カタカナの字体の点から、『アタ爪』から『ア(フ)ツル』への変化はあり得そうであるが、その逆は難しいのではないかと考える。⁽⁸⁴⁾

30、「フイ」(18オ)

資料 B-26

高山寺本	西念寺本	観智院本
<p>信 <small>言部ベーツカヒ 禾サムヘナフ ミナツシム ヲクオモシ</small> <small>セムダカス馬行 ミチウヤウキム シルレトシアキカサ子</small> <small>フツヨ</small></p>	<p>信 <small>言部ベーツカヒ 禾サムヘナフ ミナツシム ヲクオモシ</small> <small>セムダカス馬行 ミチウヤウキム シルレトシアキカサ子</small> <small>フツヨ</small></p>	<p>信 <small>言部ベーツカヒ 禾サムヘナフ ミナツシム ヲクオモシ</small> <small>セムダカス馬行 ミチウヤウキム シルレトシアキカサ子</small> <small>フツヨ</small></p>
17 ウ	16 ウ	仏上 32・33

資料 B-26 の項目は注記数が多いので、次に示すように各写本における注記の配列順に①②……の番号を付し、それに基づいて、表 B-26-1a に観智院本の配列順にしたがって各写本の注記の対照表を作成した。

資料 B-26-1a を見ると、西念寺本の標出漢字「信」の⑥「フイ」という注記が観智院本に見えないことがわかる。鎮国守国神社本では項目自体が佚文であるが、⑥「フイ」は高山寺本にも見えないので、西念寺本の増補と思われる。

西念寺本の⑥「フイ」は、左隣の⑤「ムヘナリ」に付された異本注記であるものと思われる、「⑤『ムヘナリ』の

高山寺本	西念寺本	観智院本
①在言部 ②フコト ③ツカヒ ④ツカフ ⑤ミナ ⑥ムヘナフ ⑦禾サ ⑧ユク ⑨オモシ ⑩アキラカ ⑪馬行 ⑫ミチ ⑬シルシ ⑭アーラカ ⑮トシ ⑯サネ ⑰コレ ⑱スナハチ ⑲ツ、シム ⑳ウヤアフ ㉑キハム ㉒ノフ ㉓フタリ	①言部 ②フコト ③ツカヒ ^{⑥フイ} ④禾サ ⑤ムヘナリ ^{⑥フイ} ⑦ミ ナ ⑧ツ、シム ⑨ユク ⑩オモシ ⑪セム ⑫アカ爪 ⑬馬行 ⑭シテ ⑮ウヤアフ ⑯キハム ⑰シルシ ⑱トシ ⑲アキラカ ⑳サ禾 ㉑ノフ ㉒コレ ㉓爪カ ハテ ㉔ワタリ	①言部 ②べ ③ツカヒ ^フ ④禾サ ⑤ムヘナフ ⑥ミナ ⑦ツ、シム ⑧ユク ⑨オモシ ⑩セム ⑪アカス ⑫馬行 ⑬ミチ ⑭ウヤアウ ⑮キハム ⑯シルシ ⑰トシ ⑱アキラカ ⑲サ子 ㉒フタヨ ㉓ノフ ㉔コレ ㉕スナハチ

『リ』が異本では『フ』と記されている」の意を示したものとと思われる。そこで、資料B1261aで、西念寺本の⑤「ムヘナリ」に相当する注記を確認すると、観智院本に⑤「ムヘナフ」、高山寺本に⑥「ムヘナフ」とあり、西念寺本の⑥「フイ」で示される異本の記述と一致していることがわかる。

西念寺本の⑤「ムヘナリ」に対して、観智院本・高山寺本では「ムヘナフ」と記されているが、どちらも「宜」または「諾」の意の『うべ（むべ）』から派生したもので、語義としては類似しており、標出漢字「信」のカタカナ注記としては、「ムヘナリ」も「ムヘナフ」もあり得るものである。しかしながら、観智院本・高山寺本で「ムヘナフ」としているところからすれば、西念寺本の⑤「ムヘナリ」の方が、転写の過程で『ムヘナフ』から変化した可能性が高いように思われる。

その変化の理由については、まず、両者の語義の類似により、底本の『ムヘナフ』を「ムヘナリ」と勘違いしたということが考えられるが、その場合、誤解した人物にとっては、「ムヘナリ」の語形に馴染みがあったということが

表 B-26-a

観智院本	西念寺本	高山寺本
①言部 ②べ ③ツカヒ ④禾サ ⑤ムヘナフ ⑥ミナ ⑦ツ、シム ⑧ユク ⑨オモシ ⑩セム ⑪アカス ⑫馬行 ⑬ミチ ⑭ウヤア ⑮キハム ⑯シルシ ⑰トシ ⑱アキラカ ⑲サ子 ⑳ノフ ㉑コレ ㉒スナハチ ㉓フタヨ	①言部 ②アコト ③ツカヒ ④禾サ ⑤ムヘナリ ⑥フイ ⑦ミナ ⑧ツ、シム ⑨ユク ⑩オモシ ⑪セム ⑫アカ爪 ⑬馬行 ⑭シテ ⑮ウヤア ⑯キハム ⑰シルシ ⑱トシ ⑲アキラカ ⑳サ禾 ㉑ノフ ㉒コレ ㉓爪カハテ ㉔ワタ与	①在言部 ②アコト ③ツカヒ ④ツカフ ⑤禾サ ⑥ムヘナフ ⑦ミナ ⑧ツ、シム ⑨セム ⑩アカス ⑪馬行 ⑫ミチ ⑬ウヤア ⑭キハム ⑮シルシ ⑰トシ ⑱アキラカ ⑲サネ ⑳ノフ ㉑コレ ㉒スナハチ ㉓フタ与

考えられる。

また、カタカナの『フ』と『リ』の字画の類似の点からは、底本の『ムヘナフ』の『フ』字が明確に記されていないかったために、『フ』字を『リ』と見誤ったということも考えられる。

例えば、『フ』の起筆時に筆を強く紙面に押し付けることで、入筆部が《、》のような形になり、続く横画の送筆においては力を抜いて軽く筆を送ることで、横線の《一》が、いわゆる連綿の際の細い線になり、最後の左払い《ノ》へ移る際の転折部の始めに再び力を入れ、強く筆を紙面に押し付けるようにすると、本来、一筆書きで成立する『フ』字が、《、》と《ノ》の二画で記されているかのような字形が成立するのではないかと考えられる。それは、一見するとカタカナの『ソ』のように見えることになるが、二つの字画の書かれよう、例えば初画の《、》が縦画のように記されるだけで、『リ』の字画

『フ』を「リ」と誤認する可能性が考えられる。

『ムヘナフ』から「ムヘナリ」へと変化した原因が、両者の意義的類似に起因するものか、字形的類似によるものかどうかについては不明とせざるを得ない。⁽⁸⁵⁾

注 記

※紙面の都合により本稿を分載致します。以下続。

(72) 説文解字〔説文解字 附檢字〕中華書局 1963年12月)の八上人部・九・オモテに『倭』字の記載があり、「左右兩視」の記述がある。

(73) 『倭』字については、(5)の諸橋氏の『大漢和辞典』の920に記載があり、(74)の932とは異体字の関係にあるとする。

(74) 『倭』字については、(5)の諸橋氏の『大漢和辞典』の937に記載がある。

(75) 「逵」字については、(5)の諸橋氏の『大漢和辞典』の939,940に記載がある。

(76) 但し、高山寺本の「音逵」の「逵」字が『逵』字を示しているのであれば、振仮名は「キ」とあって欲しいところではある。振仮名の問題については、別稿で考察することとする。

(77) (12)の正宗敦夫氏は、「セムスヘ」の項の「将為(便)」に対して「○高本により―を加ふ」とされ、(14)の草川昇氏は、「セムスベ・将為(便)」の項で、「観本 将為 誤り」とされている。

(78) 万葉集の四八一番歌に「白細之 袖指可倍弓 靡寐 吾黒髪乃 真白髪乃 成極 新世尔 共将有跡 玉緒乃 不絶射

妹跡 結而石 事者不果 思有之 心者不遂 白妙之 手本矣別 丹杵火尔之 家從裳出而 緑兒乃 哭乎毛置而 朝霧
髻髻為乍 山代乃 相樂山乃 山際 往過奴礼婆 将云為便 将為便不知 吾妹子跡 左宿之妻屋尔 朝廷 出立俚 夕
尔波 入居嘆会 腋挟 兒乃泣毎 雄自毛能 負見抱見 朝鳥之 啼耳哭管 雖恋 効矣無跡 辞不問 物尔波在跡 吾
妹子之 入尔之山乎 因鹿跡叙念」とある（傍線筆者）。

万葉集の本文については、新日本古典文学大系1『萬葉集 一』（岩波書店 平成11年5月）によった。改編本系の名義抄で熟字項目の「将為便」と「将云為便」が連続して記されていることと、万葉集の四八一番歌に「将云為便」と「将為便」が連続して記されていることからすれば、資料B-23、24の名義抄の出典が万葉集の四八一番歌にあると推測することは、無理のない発想と考える。また、新大系本では、傍線部の訓み下しを、「いはむすべ せむすべしらに」としているが、『万葉集校本データベース（暫定版）』（同・作成委員会 http://www.manyou.gr.jp/SMAN_1/ 平成23年9月現在）によつて、四八一番歌の「将為便」と「将云為便」の記載状況を検索したところ、「将為便」については、寛永版本・西本願寺本・京都大学本「セムスヘ」。紀州本「オンスヘ」。神宮文庫本「セムスベ」。陽明本「セムヘ（スなし）」。広瀬本「センスベシ」を見せ消ちにして「セム」を記す。類聚古集（記述なし）。「将云為便」については、寛永版本・紀州本・西本願寺本・京都大学本・陽明本「イハムスヘ」。広瀬本・神宮文庫本「イハムスベ」。類聚古集では「将」字に「ム」とのみあつて、訓み下しの際の異説は考慮しなくてもよさそうである。万葉集で「将為便」が「せむすべ」、「将云為便」が「いはむすべ」と訓み下されていることは、それぞれ資料B-23、24の各写本の記述と一致していることになる。因に、同データベースによれば、四八一番歌の「せむすべ」、「いはむすべ」の表記においては、カタカナの「ス」字を「爪」で表記した例はない。

但し、出典として万葉集を考える場合、標出漢字（熟字項目）としてはともかく、和訓の注記については問題が存する

かもしれない。すなわち、資料B-23の注記『セムス（爪）へ』や資料B-24の注記『イハムス（爪）へ』に對して、観智院本、高山寺本で声点が付されていることをどう解釈するかという問題である。朱点は、「師説」とすれば問題はなくなるのかもしれないが、「證據」と解する場合に、出典の状況を転写したものとするなら、万葉集の場合にもあり得るものかどうかは問題となるのではないかと考える。今後の課題としたい。

(79) (78) 参照。

(80) (78) の『万葉集校本データベース（暫定版）』によつて、四八一番歌の「將為便」と「將云為便」の記載状況を検索したところ、「將（將）」字を楷書で記しているのは寛永版本・神宮文庫のみで、広瀬本・類聚古集・紀州本・西本願寺本・京都大学本・陽明本では「將（將）」字を書き崩していることがわかった。中でも紀州本の「將（將）」字は、どちらも資料B-24の高山寺本の「將」の様子と類似する。但し、紀州本は「將為便」の「便」字を書き崩して「波」字のように記しており、相違点が存する。また、広瀬本では「將為便」の「便」字を「伎」に書いて訂正されている。当該箇所「將」字を書き崩した万葉集の例が存在することは確認されるが、名義抄が出典とした万葉集が、いずれのものではあるかは、その成立年および転写による系統の問題も含めて、今後の課題としたい。

なお、名義抄の出典に万葉集が存することについては原撰本系の図書寮本の記述から知られるが、索引としては、橋本不美男「図書寮本類聚名義抄出典索引」（『書陵部紀要』第一号 昭和26年3月）に「欸」（冬）「万」（歳）「月」（比）「築島裕・宮澤俊雅」『図書寮本類聚名義抄仮名索引』（出典別索引）（『図書寮本類聚名義抄 解説索引編』勉誠社 昭和51年1月）に「欸」（冬）「万」（歳）「月」（比）があり、その他、吉田金彦氏「図書寮本類聚名義抄出典攷」（下二）（『訓点語と訓点資料』第五輯 昭和30年10月）の「外典関係の出典について」の25・万葉集の項に、万葉集から「万歳」と「月比」の二例が採取されているとの指摘がある。また、池田証寿『図書寮本類聚名義抄出典略注』（『古辞書と』

『IS漢字』第3号（平成12年3月）、同『図書寮本類聚名義抄出典索引』（『古辞書とJIS漢字』第4号（平成13年3月）がある。改編本系を含めた論考で、漢文注、和訓に関する出典研究を総括したものに池田証寿「類聚名義抄の出典研究の現段階」（信州大学人文学部『人文科学論集』28 平成6年3月）がある。なお、（4）の山本秀人氏の論考に、改編本の熟字訓に対する出典調査として万葉集を対象とされた旨が注記に示されている。

- (81) ⑫「テイ」が、「チ」と「テ」の異体字の相違を示しているものと考えられないことはないが、例えば、西念寺本の「使」項目の直前の「使」項目には「爪ナハチ」という注記があり、この「チ」に相当するカタカナが、ここの⑪「タテ」の「テ」と同じ「チ」字で記されている。現西念寺本の筆者の書き癖と、異本対照時の当該本筆者の癖が同じであるかは問題ではあるが、『チ』の初画を横画に記して、『チ』と『チ』の区別がなくなるというのも、ありがちな癖ではないかと考える。

- (82) (14) の草川昇氏は、西念寺本の⑪「タテ」と⑬「フタ爪」を一つの注記『タチフタ爪』としている。また、例えば、今回の「使」項目に続く、「使」の熟字項目の最後に「遣（使）」という項目があり、その注記に観智院本（仏上31）では「タテマス」、高山寺本（17ウ）では「タチフタ爪」（但し、「爪」の二画目がなく「凡」字のように記されている）、西念寺本（17オ）では「タテフタ爪」とあることからすれば、標出漢字「使」に対して『タテマス』という訓が存在することも、あり得ないものでもないと考える。また、参考までに、この「使」に対して『タテマス』という訓があり得るかという問題について、（16）の築島裕氏の『訓点語彙集成』には、（奉使）を「タテマタシモ（「モ」の右に「テ」と記す）ノチ」と訓じた例が一例見えるが、単字「使」としての用例は見えない。因に、「使」に『タテマツル』と訓じた例も見えない。

- (83) (14) の草川昇氏は、観智院本の⑪「タテマツル」と西念寺本の『タテフタ爪』を別項目として立てられているが、両者

の関係性を示すコメントなどは特記されていない。

(84) 『タ』を乱暴に書き崩して『ツ』のようにしてしまったたり、『爪』の字画を省略して『ル』とすることはあり得そうである。逆の場合、『ツ』から『タ』は考えられなくもないが、『ル』から『爪』は、字画が増加する変化である点で、難しいのではないかと考える。

(85) (14) の草川昇氏によれば、西念寺本で『ムヘナリ』とあるものが、その他の写本で『ムヘナフ』になっている例が、標出漢字「可」の項目(西念寺本・43ウ、観智院本・仏上76、高山寺本・41オ、蓮成院本・上18オ)に見える。但し、「可」項目の西念寺本の「ムヘナリ」には異本注記が付されていない。また、観智院本の「當」(仏中110)、「宣」(法下45)に「ムヘナリ」の例が存することからすれば、観智院本で『ムヘナリ』の語形を認めていなかったということでもないらしい。因に、観智院本の「宣」の項目では「ムヘナリ」の注記の直前に「ムヘナフ」の注記も記載されている。